

大学生の男女共同参画意識に関する分析

— 家庭の影響・就業意識を中心に —

Analysis of University Students' Consciousness Towards Men's and Women's Partnership; Focusing on the Influence of the Family and the Consciousness Towards Working

菱田陽子
加藤礼子
金子劭榮

要約

石川県下国公立大学・短期大学等の学生を対象に、現代に生きる若者の男女共同参画意識を知るための質問紙調査を行った。測定されたものは、家庭での会話の話題、個人特性、さまざまな就業意識と考えられるが、男女でその内容は同一ではない。予想される、家庭における日頃の会話内容、父母の就業意識等が個人特性への影響、また就業意識への影響を推察させる関係を明らかにしようとした。男女とも家庭における生き方重視の会話が就業意識に影響を与えていると思われるが、男女により異なる側面もあり、例えば、男女共同参画志向とでも言うべき就業意識に対しては、男性では個人特性としてのバランス感覚が、また女性についてはバランス感覚に加えて拝金志向傾向も影響を与えること、個人特性としての拝金志向傾向には、男性については家庭における生き方重視傾向が、女性については現実志向傾向がそれぞれ影響を与えているようである。まだ就業の経験のない若者ではあるが、男女による就業意識への現実的な受け止め方の相違を窺わせた。

はじめに

少子高齢化が進む現代、社会を支える労働人口を如何に確保するかが重要な課題としてある。女性の社会進出が進む時代とはいえ、依然として結婚や出産を機に退職する女性が多数派であることは変わらない(岡本、2004)。「働く」ことや「生き方」は社会を支配しているイデオロギー、政策や法律等の環境要因に影響を受ける。なかでも女性は外的影響を受けやすく、また学校や家庭においても、女性のキャリア発達を促進することには、あまり関心が持たれなかったという経緯もある(渡辺、2004)。

このような社会の中で、男女が如何に振るまい、如何に貢献できるか、家庭における子育てや介護を含んだ家事分担のあり方や、地域社会での活動をしやすい環境の整備等、これらに関する人々の認識や価値基準については、極めて多様であり、また取り組みかたもさまざま、そのことが我々が生きるための環境整備を困難にしている側面もある。

これらの事柄に関連して、近年「男女共同参画社会」の実現の必要性が強調されている。これは、男女とも自らの知識や技能を最大限活用し、社会が豊かになるために貢献できるような社会の創造を目指すものであると考えられるが、そのために男女が同じようにそれぞれの能力を発揮できる環境の確保が目指される。さまざまな場において、解決すべき課題は何か、その解決のために何が必要であるかを明らかにし、その実現に向けて、さまざまな積極的取り組みがなされている。

また最近では、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現、推進に向けた取り組みが、子育て支援や仕事への意欲、満足度を促進するという意味で重要という報告も出ている（内閣府男女共同参画局、2007）。

一方、地域社会には団塊の世代を中心とした男性が戻り、地域差はあるが子育て中の女性の行動半径との重なりは増加する傾向にあらう。そこで起きる世代差あるいは性差からくる意識や行動のギャップは、これまで女性たちが築いてきた環境を変えつつある。公民館、図書館、体育館などの公共施設などの利用状況の変化はその一例である。そこに旧来の役割感を持ち込むケースも多くなるであらう。こうした状況を考えると、男女共同参画意識の啓蒙だけにとどまらず、実践的な取り組みが早急に必要である。勿論現実的には、この実現のために解決すべき課題は多く、しかもその解決は容易ではない。

筆者らはこの標本について、父母との会話を含めた家庭におけるさまざまな要因、彼らが持つ就業意識等が、男女共同参画意識とどのような関係にあるかを明らかにするために、いくつかの分析を試みている。その結果、女性も男性も家庭の中で、自分にとって何が大切か考えて生きるように、希望や夢を持つことが大切だ、趣味を持って生きることが大切、等の生き方重視を話題に、コミュニケーションをとることが、イメージ段階の青年の就労意識に大きく影響していること、これを含めてさまざまな男女差が存在することを見だし（菱田ら、2007）、仕事参画志向の女性は、性差別感を感じながらも旧来の性役割意識は低く、両立を困難とは考えず両立させたいと考えているが、この両立の意味は参画志向の強い女性とは異なるものであり、女性が認識している性差別感、仕事と家庭との両立を、始める前から困難と感じさせている可能性もあり、いかなる両立のあり方が参画といえるのかという意識改革も必要だとしている（加藤ら、2007）。これらの分析においては、一定の傾向が明らかになったようにも思えるが、試みた構造方程式モデルにより、適切なモデルが確認されたとは言えない。更にさまざまな視点からの吟味が必要であると考え、ここでは相関的分析にとどめることにする。

本研究では、自分自身の将来展望、或いは自らの近い将来の就業についての認識が必ずしも明確になっていない大学生を対象にして、彼らの意識内容を明らかにしたい。

多くの学生が次のステップとして、就職を中心とした自分の将来、すなわち自分はどのように生きていくのか、一つの選択肢を選ぶ時期が来ていることを意識している。自分らしい生き方をしたいと考えているが、それを支えるためには自分の仕事を持つことや経済的自立が必須の条件である（青島、2001）。必要なスキルや能力を身につけようとする一方で、従来の枠組みから抜け出せずに働き方、生き方を模索している者も多い。女性では従来の「仕事に、あるいは家庭に」という選択の仕方ではなく、できれば「仕事も、家庭も、子どもも」選択したい、それも自分の望むようなバランスで、という傾向も強い。働き方の選択やパートナーとのバランスは彼らにとっても現実的

大学生の男女共同参画意識に関する分析

な問題である。

男女共同参画社会の実現のために我々が持つべき認識内容を、ここでは男女共同参画意識と呼ぶことにする。これらの意識が男女共同参画の方向に向くことが、男女共同参画社会の実現に貢献すると考えられるので、これらに関する事柄について、大学生がどのように考えているかを明らかにしようとする。

目 的

本研究は、まだ就業について具体的な経験もない大学生が、将来の就業などを考えながら、男女共同参画意識についていかなる受け止め方をしているかを明らかにしようとする。これに関連して、経済感覚等の個人特性、両親の就業観や生き方・就業に関連した会話等家庭の状況、若者自身の性役割観や就業感等についてどのような関係があり、相互にどのような影響があるかを明らかにしようとする。

生き方や働き方、社会への貢献のしかた等に関する家庭における会話が、若者の就業等を中心とした意識に影響すると思われる。例えば、父母自身の就業に対する肯定的な姿勢は、子どもの積極的就業観、男女共同参画に対する積極的姿勢等を形成する可能性がある。

社会に貢献する姿勢については、現実的な事情が男女によって同一とは言い難いので、これらの姿や男女共同参画意識との関係も、性別による相違が認められるであろうと思われる。ここでは、男女別に分析を行い、これらの具体的状況を明らかにしたい。

方 法

調査対象 石川県下の国公私立大学・短期大学・大学1年生及び2年生
(男102、女498、平均年齢男18.6歳、女18.5歳)

調査時期 2007年4月 各大学等の講義室にて授業時間の一部を利用して、調査担当者が口頭説明し実施、回答されたものをその場で回収した。所要時間は約20分であった。

調査内容 主な内容は以下の通りである。

フェイスシートとして、同居家族、父母の就業形態、自分の希望就業形態等、数項目。質問項目としては、①個人特性として、経済感覚等について(10項目)、②父母の就業について(20項目)、③自分の就業に関する考え方・意欲等について(23項目)、④就業と家事との両立について(12項目)、⑤就業を含めた家族内の会話内容等について(10項目)、⑥男女共同参画意識について(10項目)、⑦就業形態の望ましさについて(この質問内容の一部は男女で異なるが、項目数は男女とも15)からなっている。ただし、ここでの項目数は当初のもので、回答の分布が極端に偏った項目等は分析から除外している。

結果と考察

1. 質問内容の因子構造

以下、ここで実施したさまざまな質問内容についてその因子構造を明らかにするために、因子分

析を試みている。その際いずれの場合も、先に触れたように、各質問項目における回答について、その評定平均値±1標準偏差が評定値の最小値或いは最大値を超える項目については、それに対する反応が極端に偏ったものと判断し、分析対象から除くことにした。因子の抽出は主因子法により、軸の回転はプロマックス法によることとし、必要に応じて因子間相関を示すことにする。また、単純構造を目指すため、必要に応じて項目を分析対象から除くこともあった。以下の因子構造を表す表に於いては、因子構造をわかりやすく示すため、その絶対値が.35を超える因子負荷量については、太字により示している。

(1) 個人特性について

ここでは、経済的感覚を中心とした個人特性について尋ねているが、表1のような因子構造を得た(因子間相関は、男性では-.089、女性では-.208)。これにより、本調査で測定している特性としては、「バランス感覚」と「拝金主義」と命名すべきものであると考える。即ちここで測定されているものは、ひとつは日常生活におけるさまざまな場面でバランスをとって生きているという自己評価、他の一つは、買い物が好きでお金の価値を認める姿勢で経済的に豊かであることを肯定的に受け止める姿勢である。

表1 個人特性の因子構造

	(男性)		(女性)	
	I	II	I	II
収支バランスを考えて買い物	.85	.01	お金は慎重に使うほう	.87 -.10
お金は慎重に使うほう	.57	-.23	収支バランスを考えて買い物	.74 .06
栄養バランスに気をつけている	.42	.29	栄養バランスに気をつけている	.40 .10
買い物が好きである	.13	.64	値段の高いものは価値がある	-.01 .48
自分らしい物や店にこだわる	.06	.53	子どもの教育にお金をかけた方がよい	.04 .48
値段の高いものは価値がある	-.18	.48	お金がなければ幸せな生活はできない	-.01 .45
子どもの教育にお金をかけた方がよい	-.05	.37	自分らしい物や店にこだわる	.10 .43
お金がなければ幸せな生活はできない	.10	.12	買い物が好きである	.00 .37

(2) 家庭環境に対する受け止め方について

就業のしかたを含めて、家庭に於いては親子の間でさまざまな会話がなされたり、生き方について話されたりしていると考えられ、それらの事柄が若者の就業意識や成長に少なからず影響を与えていると思われる。ここでは、これらの家庭内の就業に関する会話を中心とした事柄をどのように捉えているかを尋ねているが、具体的には、②父母の就業に関する質問、⑤就業を含めた家族内の会話内容等に関する質問を込みにして「家庭環境意識」とすることとし、その因子構造を明らかにしようとした。ここでの丸数字は、対応させるために、先の「方法」における「調査内容」で示したものをそのまま示している。以下の記述に於いても同様である。

その結果、男性では、「生き方を重視した家庭内会話」、「父の就業に対するプラス志向」、「母の就業に対するプラス志向」、「就業等に対する現実的な姿勢」、「母の愚痴」、「父とのコミュニケーション」なるものが存在すると考えられ(表2)、他方女性では、「生き方を重視した家庭内会話」、「母の就業に対するプラス志向」、「父の就業に対するプラス志向」、「就業等に対する現実的な姿勢」、

大学生の男女共同参画意識に関する分析

「父の愚痴」、「母の愚痴」と命名すべき因子が確認された（表3）。

それぞれ各因子間の相関も示しているが、男女とも、家庭内の生き方を重視した会話が、父及び母の就業に対するプラス志向傾向と相関していることが認められる。男女とも、父母が仕事に対してプラスの姿勢を示していると思われる場合ほど、家では人間としての生き方がよく話題にされ、父母からそのように言われていると思われる。

男女により、因子名として同じものがいくつか認められているが、まったく同一とは言えないまでも、因子としてはかなり類似していると考えて良いだろう。

表2 家庭環境意識の因子構造（男性）

		I	II	III	IV	V	VI
生き方重視	自分に何が大切かを考えて生きるように言われる	.96	.06	-.16	-.11	.04	.02
	希望や夢を持つことが一番大切だと話している	.78	-.04	.12	-.06	.01	.08
	生きがいや適性を考えて仕事を選ぶように言われる	.75	.01	.04	-.05	-.03	-.18
	趣味を持って生きることが大切であると話している	.69	.02	-.03	.01	.09	.28
	理想の人物像を心に描きながら生きなさいと言われる	.52	.00	.19	.29	-.15	-.04
父就業プラス	父は自分の仕事に誇りを持っている	-.04	.85	-.10	-.08	-.10	.11
	父の仕事に誇りに思う	.11	.83	-.01	.07	-.08	.00
	父は仕事に生きがいを感じている	-.01	.80	-.06	-.15	.04	.07
	母の仕事に誇りに思う	.10	.56	.28	.21	.10	-.21
母就業プラス	母は仕事は人の役に立つためにするものだと言っている	.02	-.26	.93	.05	.02	.12
	母は仕事に生きがいを感じている	.03	.11	.70	-.02	.00	-.05
	母は自分の仕事に誇りを持っている	-.09	.40	.55	-.13	.13	-.01
	父は仕事は人に役立つためにするものだと言っている	.06	.02	.43	.03	-.01	.21
現実志向	父には仕事を母には家庭を優先して欲しい	-.07	-.07	.00	.65	-.11	-.14
	女は職を持った方が良いと言われる	.11	.08	-.03	.62	-.02	.06
	仕事を選ぶ時は給料等現実的条件を考えるように言われる	-.02	-.14	-.08	.58	.10	.21
	男だから～、女だから～と言われる	-.11	-.02	.10	.57	.01	.03
母の愚痴	母は自分の仕事についてよく話す	-.09	-.02	.16	.00	.82	.01
	母は仕事の愚痴をこぼす	.07	-.06	-.06	-.04	.70	-.01
父との会話	父は自分の仕事についてよく話す	-.11	.30	-.09	.22	.07	.69
	私の就職について父とよく話す	.16	-.13	.19	-.06	-.02	.47
	父は家族と話すことを面倒だと思っている	.12	-.10	-.30	.16	.31	-.34

因子間相関	I	II	III	IV	V	VI
生き方重視		.38	.40	.28	.09	.25
父就業プラス	.38		.51	-.12	.11	.33
母就業プラス	.40	.51		.01	.23	.10
現実志向	.28	-.12	.01		.08	.12
母の愚痴	.09	.11	.23	.08		.01
父との会話	.25	.33	.10	.12	.01	

菱田 陽子・加藤 礼子・金子 劭榮

表3 家庭環境意識の因子構造 (女性)

		I	II	III	IV	V	VI
生き方重視	希望や夢を持つことが一番大切だと話している	.73	-.04	.03	.06	-.08	-.06
	趣味を持って生きることが大切であると話している	.70	-.04	-.07	.01	-.01	.17
	自分に何が大切かを考えて生きるように言われる	.69	.05	-.01	.03	.00	.01
	働く時、遊ぶ時、けじめを持って生きることが大切だと話している	.61	.01	-.04	-.03	-.02	.08
	生きがいや適性を考えて仕事を選ぶように言われる	.54	.00	-.07	-.18	-.01	.07
	理想の人物像を心に描きながら生きなさいと言われる	.50	.03	-.03	.25	.02	-.19
母就業プラス	母は自分の仕事に誇りを持っている	-.08	.99	-.04	.04	-.03	.05
	母は仕事に生きがいを感じている	-.01	.77	-.03	-.04	-.01	-.03
	母の仕事を誇りに思う	.06	.60	.07	-.08	-.02	.11
	母は仕事は人に役立つためにするものだと話している	.23	.36	.10	.01	.04	-.14
父就業プラス	父は自分の仕事に誇りを持っている	-.11	-.06	.87	.08	-.04	.07
	父は仕事に生きがいを感じている	-.13	.06	.76	.11	-.06	.03
	父の仕事を誇りに思う	.08	-.01	.66	-.12	.00	.03
	父は仕事は人に役立つためにするものだと話している	.22	.12	.30	.00	.20	-.18
現実志向	仕事を選ぶ時は給料等現実的条件を考えるように言われる	-.12	.04	.00	.61	.10	-.02
	女は職を持った方が良いと言われる	.18	-.06	.02	.51	-.07	.15
	父には仕事を母には家庭を優先して欲しい	.06	-.06	.08	.41	-.05	-.06
	男だから～、女だから～と言われる	-.08	-.04	.02	.40	.04	.12
父の愚痴	父は自分の仕事についてよく話す	-.06	-.02	.11	-.07	.75	-.01
	父は仕事の愚痴をこぼす	-.06	.00	-.21	.17	.70	.08
	私の就職について父とよく話す	.26	-.10	.17	-.16	.27	.09
母の愚痴	母は自分の仕事についてよく話す	.08	.21	.04	.03	.02	.69
	母は仕事の愚痴をこぼす	.04	-.10	.06	.06	.04	.66

因子間相関	I	II	III	IV	V	VI
生き方重視		.36	.36	.33	.23	.02
母就業プラス	.36		.37	.02	.14	.02
父就業プラス	.36	.37		-.11	.27	-.04
現実志向	.33	.02	-.11		.09	.11
父の愚痴	.23	.14	.27	.07		.18
母の愚痴	.02	.02	-.04	.11	.18	

(3) 就業意識について

就業意識としては、③自分の就業に関する考え方・意欲等についての質問、④就業と家事との両立に関する質問、⑥男女共同参画意識に関する質問、⑦就業形態の望ましさに関する質問(男女で異なる)について、これらが「就業に対する受け止め方」としてまとめることが出来ると考え、これらを込みにして「就業意識」と考え、これらを対象に因子分析を試みた。

男性については、「男女共同参画を志向する傾向」、「妻に対して就職してくれることを期待する傾向」、「妻に対して家庭の仕事を優先してくれることを期待する傾向」、「性差別感」、「就業に対する義務感を持ちつつ感じている就業に対する不安」、「あまり重くない仕事を志向する傾向」等が存在すると考えられる。

これに対して女性は、「社会での活動より家事・育児を優先させるような旧性役割観」、「性差別感」、「就業に対する不安」、「両立志向」、「あまり重くない仕事を志向する傾向」、「就業への意欲」が考えられる。

大学生の男女共同参画意識に関する分析

表4 就業意識の因子構造 (男性)

		I	II	III	IV	V	VI
共同参画志向	女性は社会の活動より家事育児を優先させるべき	-.75	.19	.37	.15	-.06	-.01
	仕事や地域活動のために女性も外に出ることが出来る	.65	-.03	.02	.00	.10	-.08
	働いたら生活費を家に入れるのは当然	.57	.05	.15	.18	.11	.11
	妻が仕事をすることが出来るよう家事を分担したい	.56	.14	-.10	.18	-.17	.20
	両立をすることに魅力を感じる	.54	.21	.16	-.02	-.05	.29
	男女は平等に昇格すべきだ	.48	.19	.09	-.03	-.09	.03
	楽でないので出来れば働きたくない	-.40	.19	-.03	-.13	.23	.27
妻への就業期待	自分と同様、妻にも働いて収入を	-.05	.85	-.15	-.01	.00	-.09
	子どもを預ける場所が保障されたら働いて欲しい	.05	.77	-.04	.19	-.01	.09
	妻は、生活のために働かないで良いと思う	-.30	-.48	.21	.15	-.16	.24
	仕事で社会に貢献できることが大切	.20	.46	.20	.23	-.06	-.12
妻への家事期待	妻には、結婚後、子育てが始まったら家事を大切に	.01	.03	.69	-.16	-.10	-.12
	妻は、経済的に支えなくても補助的な働き方で	.10	-.42	.63	-.12	.00	.06
	妻には、家において欲しいと思う	-.01	-.18	.63	-.03	-.09	.17
	仕事や職場が自分の人生を決める気がする	.15	.03	.50	-.20	.23	.01
	男は仕事、女は家庭という考え方はやむを得ない	-.30	-.03	.35	.10	.19	.07
ベンチャービジネスに関心がある	-.28	.23	.32	-.07	-.18	.03	
性差別感	賃金や配置等の採用条件は男が優遇されている	.08	-.05	-.14	.88	.09	.08
	社会全体で男性の方が優遇されている	.12	-.02	-.10	.68	.07	.09
	今の社会は女の方が働きにくい	-.03	.29	-.13	.52	-.06	-.04
	就職活動に男だから女だからが気になる	-.08	.15	-.04	.36	-.07	.16
就業不安	就職してもきちんと仕事出来るか不安	.08	.12	.08	-.21	.54	.19
	豊かになるために働かなければならない	.12	.10	.45	.03	.52	-.11
	自分ならではの仕事をすることが出来る	-.12	.14	.19	.04	-.49	-.07
	両立させても高く評価されない	-.14	.03	.04	.16	.48	-.16
	自分には両立は無理だ	-.25	-.07	-.01	.12	.48	.10
	男に向けた仕事と女に向けた仕事に違いがある	.16	-.08	.34	.16	.44	-.13
	卒業後働くことが楽しみだ	.36	.01	.19	.10	-.43	-.15
気楽に就業	パートやアルバイトの方が自由でいい	-.01	-.30	.03	.15	-.08	.74
	正式な採用でなくアルバイトならやってもいい	.10	-.05	.01	.20	.09	.66
	両立できる仕事を選びたい	.17	.31	.05	-.19	-.11	.54
	仕事に就くことが怖い	-.11	.12	-.04	-.02	.37	.43

因子間相関	I	II	III	IV	V	VI
共同参画志向		.38	.00	.20	-.33	-.20
妻への就業期待	.38		.03	-.04	-.30	-.03
妻への家事期待	.00	.03		.20	-.01	.00
性差別感	.20	-.04	.20		-.16	-.07
就業不安	-.33	-.30	-.01	-.16		.10
気楽に就業	-.20	-.03	.00	-.07	.10	

表5 就業意識の因子構造 (女性)

		I	II	III	IV	V	VI
旧 性 役 割 観	男は仕事、女は家庭という考え方はやむを得ない	.76	-.02	-.04	.05	-.08	.04
	女性は社会の活動より家事育児を優先させるべき	.73	-.01	-.07	.14	-.01	.03
	主たる収入は夫の給料で、妻は補助的な働き方がよい	.65	-.03	.14	.18	.01	.05
	男女は平等に昇格すべきだ	-.43	.25	.16	.07	-.04	.13
	女性は、家庭を持ったら両立もむずかしい	.39	.33	.06	-.06	.05	-.02
	家事や育児を男性も分担するのは当然	-.37	.29	.24	.11	-.03	.06
	男性は妻に家にいて欲しいと思っていると思う	.35	.21	-.08	.03	.07	.02
性差別感	賃金や配置等の採用条件は男が優遇されている	-.01	.73	-.03	-.05	-.08	.04
	今の社会は女の方が働きにくい	.04	.63	-.07	-.09	-.03	-.03
	社会全体で男性の方が優遇されている	-.06	.61	.08	-.01	-.07	.08
	就職活動に男だから女だからが気になる	.10	.49	-.09	.04	.11	-.09
	子どもを預ける場所がきちんと保障されるなら働きたい 両立させても高く評価されない	-.17 .09	.36 .30	-.19 .03	.27 -.14	.03 .09	-.10 -.07
就業不安	卒業後働くことが楽しみだ	.11	.14	-.71	.12	.05	.10
	仕事に就くことが怖い	-.02	.07	.66	.04	-.01	.05
	楽でないので出来れば働きたくない	.00	-.04	.63	-.05	.23	.10
	どんな仕事に就きたいか明確な考えがある	.06	.08	-.39	-.01	.05	.23
	家事を誰かが毎日分担してくれないと働けないと思う 自分には両立は無理だ	.03 .08	.26 .16	.33 .30	.11 -.22	-.03 .13	-.01 -.19
両立志向	両立できる仕事を選びたい	.12	-.04	-.01	.73	.12	-.15
	両立をすることに魅力を感じる	.05	-.08	-.13	.63	.08	.10
	夫と同様に、仕事を続けて収入を得たい	-.35	.14	-.14	.39	.08	.00
	豊かになるために働かなければならない	.19	.01	.35	.36	-.26	.08
	大変そうなので両立を目指さない	.16	.10	.18	-.35	.18	-.04
	仕事や職場が自分の人生を決める気がする 仕事は、収入、休日等で選ぶ	.19 .09	.18 .08	.10 .19	.31 .26	.00 .12	-.02 -.12
気 楽 な 就 業	正式な採用でなくアルバイトならやってもいい	-.07	-.11	.04	.14	.82	.03
	パートやアルバイトの方が自由でいい	.00	-.10	.18	.21	.69	.04
	生活のために働きたいとは思わない	.01	.13	-.11	-.24	.34	.12
	男性は、家庭を持ったら両立もむずかしい	.20	.15	-.05	-.04	.28	.03
就業意欲	自分ならではの仕事をすることが出来る	-.04	-.06	-.02	-.17	.08	.70
	スペシャリストをめざしたい	.13	-.01	.00	.02	-.05	.66
	ベンチャービジネスに関心がある	-.03	.00	-.02	-.09	.25	.48
	仕事で社会に貢献できることが大切	.08	.10	-.13	.12	-.03	.32

因子間相関	I	II	III	IV	V	VI
旧性役割観		-.11	.32	-.32	.34	-.21
性差別感	-.11		.23	.30	-.04	.16
就業不安	.32	.23		-.19	.37	-.32
両立志向	-.32	.30	-.19		-.25	.47
気楽な就業	.34	-.04	.37	-.25		-.12
就業意欲	-.21	.16	-.32	.47	-.12	

質問項目が全く同じではないこともあるが、男女でかなり因子構造が異なる。勿論、因子数も含め、因子構造は客観的に得られるものではないので、男女間の相違がどれほどであるかを断定することは出来ない。

大学生の男女共同参画意識に関する分析

2. 就業意識の、家庭の状況、個人特性との関係

ここで測定されたと考えられる各因子について、大学生等がもつ就業意識の特徴を把握するために、いくつかの重回帰分析を試みた。なお、本分析においては、以下についても、重回帰分析はすべてステップワイズ法を採用している。

なお、参考までに、各因子の因子得点により相関係数を求めている（表6及び表7）。各表中の太字は、相関係数が5%水準で有意な値であることを示している。

表6 個人特性、家庭環境意識、就業意識各因子間相関係数（男性）

	個人特性		家庭環境意識						就業意識						
	バランス感覚	拝金主義	生き方重視	父就業プラス	母就業プラス	現実志向	母の愚痴	父との会話	共同参画志向	妻への就業期待	妻への家事期待	性差別感	就業不安	気楽に就業	
バランス感覚 拝金主義	-.11														
生き方重視	.06	.30													
父就業プラス	.18	.01	.41												
母就業プラス	.10	.11	.43	.56											
現実志向	-.08	.23	.30	-.14	.01										
母の愚痴	.08	.22	.10	.12	.28	.09									
父との会話	-.03	.00	.30	.40	.14	.17	.02								
共同参画志向	.26	-.08	.21	.19	.21	-.16	.04	.20							
妻への就業期待	.28	.10	.27	.23	.18	.11	.07	.16	.44						
妻への家事期待	.00	.41	.15	-.08	-.01	.28	.00	-.06	-.01	.01					
性差別感	-.14	.14	.18	.01	.21	.37	.05	.15	.24	-.04	.21				
就業不安	-.15	-.21	-.44	-.24	-.39	-.16	-.10	-.29	-.40	-.35	.00	-.18			
気楽に就業	.01	.01	.07	.05	.11	.30	.22	-.10	-.22	-.05	.00	-.06	.13		

(太字 p<.05)

表7 個人特性、家庭環境意識、就業意識各因子間相関係数（女性）

	個人特性		家庭環境意識						就業意識						
	バランス感覚	拝金主義	生き方重視	母就業プラス	父就業プラス	現実志向	父の愚痴	母の愚痴	旧性役割観	性差別感	就業不安	両立志向	気楽な就業	就業意欲	
バランス感覚 拝金主義	-.30														
生き方重視	.08	.09													
母就業プラス	.07	.06	.40												
父就業プラス	.04	.07	.41	.41											
現実志向	-.05	.21	.42	.04	-.12										
父の愚痴	.02	.08	.28	.16	.32	.13									
母の愚痴	-.02	.14	.04	.04	-.03	.18	.25								
旧性役割観	-.14	.14	.06	-.02	.00	.23	-.03	-.08							
性差別感	.02	.24	.14	-.05	-.03	.26	.05	.17	-.13						
就業不安	-.24	.12	-.16	-.15	-.17	.17	-.05	.06	.37	.26					
両立志向	.18	.23	.26	.11	.14	.08	.09	.12	-.37	.36	-.25				
気楽な就業	-.22	.06	.02	-.08	-.07	.12	-.10	-.05	.40	-.06	.46	-.28			
就業意欲	.11	.22	.36	.18	.23	.09	.10	.08	-.25	.19	-.40	.56	-.14		

(太字 p<.05)

(1) 家庭環境意識と個人特性

個人の特性は家庭環境によって影響を受けると思われる。ここで取り上げた範囲での家庭環境、主に就業について、或いは生き方についてどんなことが話題になっているかを尋ねている。

この家庭環境意識を独立変数として、ここでの個人特性「バランス感覚」及び「拝金主義」を従属変数として、重回帰分析を試みた。

その結果、「バランス感覚」については有意な偏回帰係数が得られず、「拝金主義」もあまり明確に予測されたとはいえない(決定係数が、男性では.082、女性では表8の通り.061)。

表中、「-」とあるのは、分析により独立変数から除外されたことを示す(以下の分析でも同様)。

関与する独立変数としては、男性では、「生き方重視」、女性では、「現実志向」、「母の愚痴」、「父就業プラス」がいずれも有意なプラスの値を示した。

即ち、ここで扱った「バランス感覚」の特徴を(重回帰分析によって)明らかにすることは出来なかった。

他方、経済的に豊かになることを重視する「拝金主義」とでも言うべき態度は、男性については「生き方重視」つまり、何が大切であるかを考えながら生きること、自分の適性にあった仕事に就くべき等が話し合われると受け止めているほど経済的豊かさを大切にしている傾向があるのに対して、女性では、働く際には給与等の現実的条件を考えるべきである、女性も職を持つために技術を持つべきだ等の話題があった(との受け止め方)、母とよく話をする、父の就業へのプラス姿勢を感じているほど経済的豊かさが重要であると考えられる傾向にある。経済的豊かさを重視する傾向は、今の時代にあっては大多数の者が考える課題であるとの認識のもとに、この傾向を理解する必要がある。

表6によれば、男性では、拝金主義が「生き方重視」、「現実志向」と正に相関、女性では「現実志向」と相関しているが、ここでの重回帰分析によれば、男性では他の変数の影響を一定にした場合に「生き方重視」のみが効いており、「現実志向」傾向はこの「生き方重視」と相関していることにより、それ独自の関与は認められない。女性については逆に、「現実志向」と「母の愚痴」に加えて、「父就業プラス」があるほど「拝金志向」が強い傾向がプラスされている。

男性は生き方に関連しているが、女性では現実志向傾向が関連しており、男女間での経済的豊かさを志向することへの原因が異なることを窺わせる。

(2) 個人特性と就業意識

個人特性によりその個人が持つ就業意識が規定されると考えられるので、個人特性を独立変数、就業意識を従属変数とした重回帰分析を試みた。なお、就業意識については、男女の相違により質問内容が異なるものがあるため、因子構造は異なっており、従って従属変数は男女で同一ではない。

ここで想定された独立変数が2つしかないこともあり、係数が有意な値を示す独立変数が複数であるものは、男性では全くなく、女性でもこれに相当するものは一部のみであった(表9及び表10)。また、決定係数がとても小さいものであり、ここでの分析で十分に予測されたと判断するわ

表8 家庭環境意識から個人特性の予測(女性)

	バラン ス感覚	拝金 主義
決定係数	-	.061
生き方重視	-	-
母就業プラス	-	-
父就業プラス	-	.101
現実志向	-	.208
父の愚痴	-	-
母の愚痴	-	.109

大学生の男女共同参画意識に関する分析

けにはいかないが、得られた結果から窺える事柄を以下に示したい。

先の表6及び7における相関係数を含めて、ここで明らかになった傾向を見ると、男性の「拝金志向」傾向は妻の就業を期待せずむしろ家庭における分担を期待する傾向にあり、就業に対する不安を感じさせないようである。他方、男性の「バランス感覚」は妻への就業期待と男女の共同参画意識をもたらすことが窺える。ここで得られた結果は、男性の経済的に豊かになることを目指す傾向が、男女共同参画意識を促すことにはなっていないことを示している。

他方女性については、両立志向、就業意欲、性差別感のいずれについても、バランス感覚及び拝金主義の両方とも、プラスの係数を示している。また旧性役割観については、バランス感覚はマイナス、拝金主義がプラスの値を示している。この2つの独立変数間の相関係数は、(男性については有意ではなかったが)女性についてはマイナスの有意な値を示しているので、ここで得られた偏回帰係数の解釈には注意を要する。先の表7に示される相関係数はここでの偏回帰係数よりも小さな値を示しておりあまり関連がないように見えるが、実際には、バランス感覚と拝金主義はそれぞれかなり大きな影響を与えていると考えられる。

表9 個人特性から就業意識の予測 (男性)

	共同参画志向	妻への就業期待	妻への家事期待	性差別感	就業不安	気楽に就業
決定係数	.060	.067	.162	-	.033	-
バランス感覚	.264	.278	-	-	-	-
拝金主義	-	-	.413	-	-.207	-

表10 個人特性から就業意識の予測 (女性)

	旧性役割観	性差別感	就業不安	両立志向	気楽な就業	就業意欲
決定係数	.025	.066	.056	.120	.047	.081
バランス感覚	-.103	.108	-.240	.279	-.220	.199
拝金主義	.110	.279	-	.319	-	.283

具体的には、経済的に豊かになることを重視しそれを目指そうとする女性ほど、両立志向を示し、就業意欲は強く、性差別感を強く感じているが、他方では旧性役割観をも持っている。仕事することに意欲を持ち両立させたいと思いつつ旧性役割観を持っているようである。他方バランス感覚を有するほど、両立志向、就業意欲が高く、性差別感を感じているが、旧性役割観を持っていない。女性の場合には、ここで扱われた「バランス感覚」の有無が彼女らの就業意識に大きな影響を与えていることが窺える。

(3) 家庭環境意識と就業意識

次に、就業意識を従属変数とし、家庭環境認識を独立変数とした重回帰分析を試みた(表11及び表12)。家庭環境意識についての質問項目は同じであるが、先にも示したようにその因子構造は同一とはいえないため、以下の分析においても男女により独立変数は同一ではない。また、ここで

得られた決定係数も十分な値ではないことを考慮しながら、結果を見てみたい。先にも触れたように、男女で家庭環境意識及び就業意識の因子構造が異なるので、独立変数及び従属変数ともに異なる。

男性では「就業不安」は（決定係数の大きさから）それなりに予測できていると思われるが、就業不安は、家庭で生きていく意味、その大切さについて話されているもの、或いは、母親を中心として働く意味を考えていたり、仕事が社会に貢献することが重要であると言っている等、母親の就業への積極的姿勢と「逆」の関係にある。つまり、家庭で生きる意味を考えたり、仕事で社会に貢献することを話したりしない者が、就業への不安感を持っているようだ。家庭で働くことの意義を考えたりすることが、就業への不安を軽減させることを窺わせる。この生き方重視と母の就業プラス傾向はプラスに相関しているため、実際には就業不安とはより大きな関連があるが（表6）、生き方重視傾向も、母親の就業プラス傾向も、特有の関与をしている。男性が父親ではなく母親の就業プラス傾向と関連を示していることは、母親との結びつきが強いことを窺わせ、興味深い。また複数の独立変数と有意な関係が認められたのは、この就業不安のみである。

他方、単純な相関関係であるが、現実的就業を肯定するほど、性差別感を強く感ずる傾向にある。性差別感は、必ずしもマイナスのイメージではなくて、性差別に目覚めているとも考えられるが、男女平等の実現は困難であると考えられることも含め現実的に行動していると、男女差別感をより強く感じていると思われる。

それ以外のものについては決定係数が小さく、あまりうまく予測されたものであるとは言えない。

表11 家庭環境意識から就業意識の予測（男性）

	共同参 画志向	妻への 就業期待	妻への 家事期待	性差 別感	就業 不安	気楽に 就業
決定係数	—	.062	.066	.126	.224	.080
生き方重視	—	.270	—	—	-.330	—
母就業プラス	—	—	—	—	-.245	—
現実志向	—	—	.278	.369	—	.300
母の愚痴	—	—	—	—	—	—
父との会話	—	—	—	—	—	—

表12 家庭環境意識から就業意識の予測（女性）

	旧性 役割観	性差 別感	就業 不安	両立 志向	気楽な 就業	就業 意欲
決定係数	.066	.081	.084	.074	.024	.125
生き方重視	—	—	-.269	.252	—	.357
父就業プラス	—	—	—	—	—	—
母就業プラス	—	—	—	—	—	—
現実志向	.254	.240	.275	—	.137	—
父の愚痴	—	—	—	—	-.117	—
母の愚痴	-.123	.132	—	.115	—	—

大学生の男女共同参画意識に関する分析

ここでの「共同参画志向」は、就業に対して前向きであり、男女が助け合って働くことを肯定する傾向を示しているが、家庭環境意識に関しては何ら関係が見いだされなかったことに、注目しなければならない。男性の家庭環境に対する受け止め方が、ここで目指している男女共同参画に関する意識形成に関与していないことを示している。

その他では、生き方重視傾向が妻への就業期待をもたらし、現実志向傾向が妻への家事期待やアルバイト等気楽な就業が関係している。

女性についてみると、男性より更に決定係数が小さい。

就業への意欲、これは自分ならではの仕事が出来ると思う傾向等であるが、そしてこれについても独立変数が複数関与している状況にはないが、「生き方重視」が関与している。

これ以外については決定係数がかなり小さいが、偏回帰係数が有意なものを見ていくと、「就業不安」は、「現実志向」が強く、「生き方重視」つまり家庭で生き方についての話が少ない場合に強まるようである。この独立変数は相互にプラスに相関しているので、実際にはそれぞれの変数が「就業不安」にあまり関連がないように見える(表7)。しかしそれぞれの変数の関わりは小さいとは言えず、理想を追うことよりも現実的に考えることと、母親が就業にプラス志向であると思わない女性が、就業に対して不安を覚えているようである。

性差別感、現実志向と母の愚痴と関連が認められる。この2つの独立変数は相互にやゝプラスに相関しているが、現実的に生きる方が良いという家族での会話や母との仕事を中心とした会話が、現実の性差別を感じさせていることを窺わせる。

両立志向は、両立させることに意義を認めそれを求める姿勢であるが、生き方重視と母親の愚痴が関与している。家庭内で生き方についてよく話し、母親から仕事の話をよく聞くと、両立させたいと考えるようになるのであろう。

旧性役割観は、現実志向とプラスに、母親の愚痴とマイナスに関連しているが、現実的に考えることや母とあまり話をしない傾向が、旧性役割つまり古い性役割観を持っていると思われる。母からの情報が、旧性役割観をもつか、性差別感を感じずかを規定することが窺える。

これ以外にも、現実志向し父の愚痴を聞かない(父とあまり話をしない)ほど気楽な就業を志向する傾向が認められるが、よく予測したとは言い難い。父からの情報が何か効いているようにもみえる。

全体的考察

本研究は、若者の男女共同参画意識とでも言うべきものについて、その実態を明らかにしようと計画され、特に彼らのこれまでの家庭環境と彼らの就業に関する受け止め方の状況と、それらの間の関係について分析を試みた。近年話題にされることの多いテーマではあるが、男女共同参画意識の具体的内容については必ずしも明確になっていない。本研究においても、これまで話題になった事柄を参考に質問項目を考えたが、必ずしも適切な内容であったとは言えず、今後検討すべき課題として残された。

ここでの分析結果によれば、予想されたように男性と女性とではその傾向は同じではなかった。個人特性としてはバランス感覚と拝金志向傾向を考えているが、男女により相違があるものの、こ

の2要因とも就業意識にそれなりに関連を持つことが確認された。男性の経済的に豊かであることが価値あることだとする傾向は、女性に就業を期待せず、自分自身の就業に対する不安を感じておらず、男女共同参画意識を促すことにはなっていない。他方バランス感覚がこの意識を強めていると思われる。女性では、男女共同参画意識という名称でまとめられるような因子を見いだしていないが、このバランス感覚は、両立志向、就業意欲、性差別感を強め、旧性役割観、就業不安、気楽な就業を弱めていることは、男性に認められた傾向と類似し男女共同参画意識を強めていると考えて良いだろう。同時に女性では、経済的豊かさを重視する傾向もこれらを強めていることが推測され、男性とは対照的である。即ち、女性では、バランス感覚ないし生活における慎重さが男女共同参画意識を強める傾向があるが、同時に拝金志向傾向もこれに関与しているようである。男性は経済的豊かさを意識することから男女共同参画を意識しないが、女性では経済的豊かさもそれを意識する重要な要素となっており、現実的経済的豊かさが男性に比較して強いことを窺わせる。男性がそのように経済的豊かさを考えないように見えるのをどのように解釈すべきか、少し吟味が必要であろう。

これらの個人特性のうち、経済的豊かさに価値を認める傾向（拝金主義）は、男性では生き方を考えることが、女性では現実志向傾向、母との会話、父就業プラス傾向が関連しているが、他方の個人特性であるバランス感覚は、ここで取り扱った範囲での家庭環境意識によっては説明されなかった。しかも、これは以下に述べるように就業意識との関連が認められているので、どのような家庭要因がバランス感覚を育てると思われるかを含め、今後更に詳細な吟味、分析等が必要である。

家庭環境をどのように受け止めているかという「家庭環境意識」については、男女ともに、生き方について家庭でよく話をする傾向、現実的に就業を考える傾向、父母との会話、父母の就業に対するプラス志向傾向等（いずれも同一名称でも男性とその内容が必ずしも同じものではないが類似している）の、さまざまな就業意識との関連が認められる。

男性では、「生き方重視」傾向が妻への就業期待を強め、自分自身の就業不安を弱めているが、女性では「生き方重視」は、両立志向を強め、就業不安を弱め、就業意欲を強めている。即ち、生き方重視傾向（家庭でそのようなことをよく話していると受け止めている傾向）は、共同参画傾向を強めると想像できる。

他方「現実志向」傾向も多くの就業意識と関連しているようであり、男性では性差別感を感じながら（男性の場合は自分には厳しい現実とはなっていない）、アルバイト等気楽な就業を考え、妻への家事の期待が強い。つまり、男性が現実的に考えることは、就業に対する厳しさや中長期的展望を持っていない可能性を窺わせる。

一方女性では、「現実志向」傾向は、就業不安、旧性役割観、性差別感、気楽な就業を強めるようで、男性と異なり、現実的な厳しさを感じながらあまり本格的な就業が出来ないのではないかと考え、当面気楽に働くことしか現実的にはできないと考えるのかもしれない。また母との会話が性差別感、両立志向傾向を強め、旧性役割観を弱めるといように、母親との会話が少なからず影響を与えていると思われる。

ここでは就業に関する受け止め方（就業意識）を中心に分析を試みたが、先に触れたように、ここで使用した質問紙の内容のうち、男女共同参画意識に関する部分についてはその適切性について

大学生の男女共同参画意識に関する分析

改めて吟味する必要がある。関連する事項としては、男女平等感（差別感）、性役割観、家庭運営と就業との両立、男女の生き甲斐感、男女の人権意識、等がこれに関連するものとして考えられるが、国等が男女共同参画社会の実現に向けて考えているものを参考にしながら、それなりにそこで定義づけそれに沿った質問内容を改めて考えることも必要であろう。

文献

青島祐子『女性のキャリアデザイン：働き方・生き方の選択』、学文社、2001年、p.238

菱田陽子・加藤礼子・金子劭榮「大学生等を対象にした男女共同参画意識の分析（1）

：家庭環境の影響を中心として」、『日本教育心理学会第49回総会発表論文集』、2007年、p.645

加藤礼子・菱田陽子・金子劭榮「大学生等を対象にした男女共同参画意識の分析（2）

：仕事と家庭の両立を中心とした就業意識について」、日本教育心理学会第49回総会発表論文集、2007年、p.646

内閣府男女共同参画局『男女共同参画社会の実現を目指して』、2007年

岡本英雄「女性のキャリア形成と生涯学習」、国立女性教育会館『女性のキャリア形成支援に関する調査研究報告書』、2004年、p.1-8、

渡辺三枝子「女性のキャリア形成支援の実践：心理学の視点から」、国立女性教育会館『女性のキャリア形成支援に関する調査研究報告書』、2004年、p.58-67

（注）本研究は、平成19年度北陸学院短期大学研究費の補助を受けて行われたものである。